

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代日本語における動詞からの転成副詞の形態的分類
Author(s)	リナ インドリアニ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1996 : 85 - 92
Issue Date	1997-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039399
Right	
Relation	



現代日本語における動詞からの転成副詞の形態的分類

リナ インドリアニ

1. はじめに

品詞として、連用修飾語になるといった、ただ一つの構文論的な機能しかもたないのが副詞の品詞論的な特徴である。この構文論的な機能の単純さのために、副詞には語形変化が認められない。つまり、形態論的ないわゆる活用は見せないのである。語形変化は見せないものの副詞には他の品詞からの転成によるものが多く見られる。

阿久津智は「動詞からできた副詞」（『日本語ジャーナル』1993・12）をとり上げた。それによると副詞には以下の三つの転成のパターンが認められるという。まず、動詞の古い否定形「一ず」からできたものがある。例えば、「絶えず」は動詞「絶える」の否定形が副詞になった。次に、副詞には動詞のくり返しからできたものがある。例えば、「ますます」は「増す」のくりかえしが副詞になった。他にも、副詞には「漢語（音読みの漢語）＋して」の形のものもある。例えば、「決して」は、漢語「決」に、動詞「する」のテ形「して」がついて、副詞になったという。

阿久津智が指摘した以外にも副詞の転成パターンが認められる。例えば、名詞のくりかえし（例：くちぐちに、わざわざ、やまやまと、たびたび、など）や、形容詞の語幹のくりかえし（例：あかあかと、長々と、さむざむと、など）や形容詞の語根のくりかえし（例：こまごまと、しずしずと、はるばると、など）などがある。

本論では、阿久津智の書いたものを中心にして、動詞からできた副詞すなわち動詞からの転成副詞について考察を進めていく。動詞からできえ転成副詞を形態的に分類しようとするものである。また、どんな動詞が転成副詞となるかということも明らかにしていきたい。

1. 1 副詞の認定

まず、副詞とはどんなものであろうか見てみよう。『日本文法大辞典』の説明は、次のように記述されている。

「品詞の一つ。単独で文節（あるいは句）を構成し、主として文の成分上連用修飾語に用いられる語」。

つまり、副詞は用言や述語を修飾する働きをなす語である。「わたしは彼の行為を断じて許さない」という例文で、「断じて」は右の用言「許さない」を修飾し

て、連用修飾語になっている。そのような働きをもつのが副詞といわれる。そして副詞は名詞、代名詞のように主語となることができず、用言のように述語となることもできない。時を表す名詞「来年、今日」や、形容詞の連用形「おいしく食べた」「早く読んだ」や、連語「これから、今まで」なども連用修飾語となることが多く、数詞も「本を三冊借りた」「一時間待った」などと連用修飾の働きを持つが、これらは主語や述語に立つことができるので、副詞の中に含まれていない。以下にいくつかの副詞の例をあげる。

かわるがわる・こっそり・ゆっくり・わざと・かつて・すぐ・また・すっかり・総て・みんな・にっこり・そよそよ・いちばん・とても・すごく・ずっと・更に・もっと・相当・随分・よほど・大変・至って・大分・結構・ひときわ・いちだんと・決して・見る見る・思わず・さすが・かならず・きっと・たしか・いわば・あらためて・あわせて・行く行く・延び延び・返す返す・

1. 2 動詞の認定

動詞の認定についても見ていこう。動詞は品詞の一つであり、日本語では用言に属し、活用がある。活用の型、意味、文法上の機能などによって、形容詞・形容動詞とは区別される。言い切った音がウの段で終わり、事物の動作、作用、状態、存在を表す語。例：読む、起きる、放す、買う、など。

1. 3 品詞転成とは

品詞の転成については、『日本文法大辞典』では次のように記述されている。「ある品詞が、意味、用法、をかえて、他の品詞に転ずること」(p. 713)。

上の定義を見ると、転成は、語形変化をあまり変えず、ただ意味・用法をかえて他の品詞としての性質を獲得することとなる。だから本来の品詞的特性を失わないと、それは転成とは言わない。例えば形容詞の連用形が副詞的に機能するからと言って、形容詞から副詞に転成したとは言わない。そして、「春一春めく、苦しい一苦しがる、女一女らしい」などのように接尾辞を伴って品詞が変わる場合にも転成と言われることがあるが、これらは派生によって別語になったと解釈するのが普通である。しかし、「する」を付けてサ変を作るのが転成か派生か、またそのいずれでもないのか、これについてはまだ問題が残っている。

2. 転成副詞の形態的分類

副詞の転成については、橋 豊「連体詞・副詞と他品詞との関係」（『品詞別日本文法講座5 連体詞・副詞』）・島 郁「副詞への転成」（『副詞の意味と用法』）・阿久津智「動詞からできた副詞」（『日本語ジャーナル』1993・12）・などの論文がすでに発表されている。それらを参考にして、転成副詞は以下のように形態的に分類される。

2. 1 動詞の活用形からの転成

2. 1. 1 連用形からの転成

連用形からの転成副詞は数が少ない。これには、語尾「に」をつける語もあるし、つけない語もある。例：あまり・つまり・代わりに・さしあたり・くりかえし・思い切り・折り返し・悔し紛れに・うまれつき・取り急ぎ・取り分け・引き続き・入れ代わり立ち代わり・ひと思いに・ひとわたり・目の当たりに・日増しに・目引き袖引き・思い入れ・頻り・その代わり・その割りに・それきり・それに引き換え・互い違い・次・出来る限り・とびきり・何かにつけ・何はさて置き・並びに・根掘り葉掘り・打付けに・乱りに（古語の乱る）。

2. 1. 2 テ形からの転成

これに含まれる語はたくさんある。例：改めて・いたって・挙げて・合わせて・追って・重ねて・極めて・果たして・晴れて・絶えて・好んで・強いて・締めて・奮って・思い切って・折り入って・増して・返って・努めて・誤って・相次いで・誓って・通じて・謹んで・すきこのんで・とんで・ひきつれて・息せききって・ことよせて・うちつれて・かいつまんで・たまりかねて・など。

さらに、漢語に「する」を加えて、副詞に転成する語もある。例えば（辛いー辛く＋するー辛うじて）・「決心」の「決」——決して・「大概」の「概」——概して・「大変」の「大」——大して・「断定」の「断」——断じて、である。

橋 豊は「連体詞・副詞と他品詞との関係」（『品詞別日本文法講座5 連体詞・副詞』）（p. 158）の中で、絶えて・敢へて・総て・返りて、を動詞連用形＋「て」の例としてあげている。

また、「一として」という副詞もあるが、例えば、「依然として・頑として・肅として・遅遅として・時として・牢として」など、これは「品詞の転成」（『語彙の研究と教育（下）』）によると、動詞からの転成副詞と認められるという。

しかし、「一にして」、「一ては」という副詞もあるが、例：「いずれにしても」、「往々にして」、「延いては」、「今となつては」、パターンから見ると、テ形からの転成副詞と認められるが、これがたしかに動詞からの転成副詞と確認する参考はない。

2. 1. 3 仮定形からの転成

仮定形からの転成は二つしかない。すなわち、「言わば」と「例えば」である。この副詞は動詞未然形に「ば」を加えて、転成したものと言える。

2. 1. 4 未然形からの転成

未然形からの転成はパターンがいろいろあるけれども、例は非常に少ない。そしてほとんど古語しか出てこない。

橋 豊は「連体詞・副詞と他品詞との関係」（『品詞別日本文法講座5 連体詞・副詞』）（p. 157-158）の中で、以下のように分類されている。

ア. 動詞未然形+「く」

例：日はく・宣はく・恐らく

イ. 動詞未然形+「く」+「は」

例：願はくは・恐らくは

ウ. 動詞未然形+「ば」

例：言はば・たとへば

エ. 動詞未然形+「む」+「や」

例：言はむや（現代副詞ではいわんや）

2. 1. 5 終止形からの転成

これについても同じ論文の中で、橋 豊は以下のように分類されている。

ア. 動詞終止形+「-a k u」

例：日はく・宣はく・恐らく

イ. 動詞終止形+「-a k u」+「は」

例：願はくは・恐らくは

ウ. 動詞終止形「らく」+「は」

例：疑ふらくは

上の文を見ると、未然形からの転成と終止形からの転成はパターンがほとんど同じで、転成する語も同じである。しかし、この語は「恐らく」と「願はくは」の以外に、現代部の副詞ではもう出てこない。

2. 1. 6 連体形からの転成

この転成副詞は橋 豊によるとパターンが一つしかない。すなわち「動詞連体形」+「に」。例：思ふに・詮ずるに・案ずるに、というものである。

この副詞は未然形と終止形からの転成副詞と同じように、現在では使われていない。

2. 2動詞のくりかえしからの転成

2. 2. 1終止形からの転成

例：ますます・返す返す・見る見る・行く行く・泣く泣く・恐る恐る・重ね重ね・かわるがわる・知らず知らず。

2. 2. 2連用形からの転成

これに含まれるものは「に」をつける語もあるし、「に」をつけない語もある。
例：生き生き・ありあり・浮き浮き・うねうね・追い追い・折々・くねくね・けちけち・絶え絶えに・飛び飛びに・泣き泣き・延び延び・伸び伸び・晴れ晴れ・冷え冷え・惚れ惚れ・休み休み、など。

2. 3動詞否定形からの転成

例：相変わらず・思わず・透かさず・絶えず・引きも切らず・人知れず・負けず劣らず・我知らず・思いがけず・思わず知らず・知らず知らず・残らず・所構わず・ところ嫌わず・多少にもかかわらず・取りも直さず・やむを得ず・うむをいわせず・間髪を入れず・止むに止まれず・細大漏らさず

そして、「少なからず・悪しからず・遠からず」という副詞は、畠 郁「副詞への転成」（『副詞の意味と用法』）によると、これは形容詞の「カリ活用形」＋「ず」からの転成副詞であって、動詞否定形からの転成ではないという。

2. 4自動詞・他動詞からの転成

阿久津智は「擬音語・擬態語からできた動詞」（『日本語ジャーナル』1992・8）をとりあげた。それによると動詞には擬音語・擬態語からできたものがたくさんあるという。パターンは以下のように示されている。

ア. 擬音語・擬態語「a b a b」――一段の自動詞「a b eる」（bの母音がエ段に変る）。

擬音語・擬態語「a b a b」――五段の他動詞「a bす」

例：ゆらゆら――ゆれる（揺れる）――ゆらす（揺らす）

からから――かれる（枯れる）――からす（枯らす）

たらたら――たれる（垂れる）――たらす（垂らす）

ひやひや――ひえる（冷える）――ひやす（冷やす）

イ. 擬音語・擬態語「a b a b」――五段の自動詞「a bむ/a bる」

例：ぺこぺこ——へこむ

ぎしぎし——きしむ

ぴかぴか——ひかる（光る）

このタイプのバリエーション。次の左のものは一段の自動詞である。

ぶるぶる——ふるえる（震える）——他動詞は「ふるわす」

のびのび——のびる（伸びる）——他動詞は「伸ばす」

ウ. 擬音語・擬態語「a b a b」——五段の自動詞「a b ぐ／a b く」

例：ざわざわ——騒ぐ

いそいそ——いそぐ

そよそよ——そよぐ

ぱたぱた——はたく

このタイプのバリエーション「a b a b」——一段の自動詞「a b げる／a b ける」

ころころ——ころげる（転げる）

どろどろ——とろける

にやにや——にやける

エ. 擬音語・擬態語「a b a b」——五段の自動詞「a b めく」

例：きらきら——きらめく

よろよろ——よろめく

どきどき——ときめく

オ. 擬音語・擬態語「a b a b」——五段の自動詞「a b つく」

例：まごまご——まごつく

ふらふら——ふらつく

うろうろ——うろつく

むかむか——むかつく

いらいら——いらつく

だぶだぶ——だぶつく

ねばねば——ねばつく、など。

上に示されたものは擬音・擬態語からできた動詞であるが、擬音語・擬態語は副詞に含まれているので、これらは自動詞・他動詞からの転成副詞と言える。しかし、「品詞の転成」（『語彙の研究と教育（下）』）によると、これらは転成ではなくて派生語とされている。

結論

以上、動詞からの転成副詞の形態的分類を見てきた。その結果を以下のようにまとめることができる。

1. 動詞の活用形による転成副詞は、連用形と仮定形以外のものは、現代副詞では使われていない。
2. ある語には語形変化を示し、それは転成なのか、派生なのか、簡単に認められないことがある。例えば：主とする――主として
時とする――時として
これらの語は転成か派生か、まだ問題になっている。そして、「うろつく――うろうろ」「はためく――はたはた」「びくつく――びくびく」などという語についても、ある研究によると、これは動詞からの転成副詞とされているが、他の研究によると、これは派生語と認められるという。
3. 転成副詞は、もとの語との形態的關係、機能的關係など多くの観点から考察する必要があるだろう。

参考文献

1. 飛田良文・浅田秀子 『現代副詞用法辞典』 (1994) 東京堂出版
2. 島本 基 編 『副詞用例辞典』 (1989) 凡人社
3. 松村明編 『日本文法大辞典』 (1971) 明治書院
4. 島 郁 (副詞への転成) (『副詞の意味と用法』1995 国立国語研究所)
5. 橋 豊 「連体詞・副詞と他品詞との関係」 (『品詞別日本文法講座 5 連体詞・副詞』1973 明治書院)
6. 鈴木舟士郎 「動詞の問題点」 (『品詞別日本文法講座 動詞』1991 明治書院)
7. 市川 孝 「副用語」 (『岩波講座 日本語 6 文法 1』1976 岩波書店)
8. 新川 忠 「副詞について」 (教育科学研究会・国語部会編『教育国語』2・21 1996、むぎ書房)
9. 阿久津智 「動詞からできた副詞」 (『日本語ジャーナル』1993・12 アルク)
10. 阿久津智 「副詞 一て」 (『日本語ジャーナル』1993・9 アルク)
11. 阿久津智 「擬態語・擬音語からできた動詞」 (『日本語ジャーナル』1992・8 アルク)

(8)

- 1 2. 「品詞の転成」 (『語彙の研究と教育 (下) 1994 日本語教育指導参考書・13 国立国語研究所)